

「犬」とビクターと

熊倉雄三 NIPPERよ永遠なれ

○中山晋平、勝太郎、宮城道雄

『昭和八年に早稲田大学を卒業し、翌年の九年に日本ビクターの文芸部に入った私は、それからの五十年間を、レコード制作の文芸部と芸能関係、並びに日本ビクター全商品の宣伝の業務等で過ごして来ました。その長い間の大部分が芸術家との仕事でした。世の移り変わりにつれて、求められる音楽の形容も変わってまいりましたが、その流れの中で色々な芸術家との交遊を持ちました。従って様々な思い出を、今懐かしく回顧しています。到底書きつくせるものではありませんが、幸いにして元気で八十才を迎えるに当って、書き残したいと思ひ立ちました：』之は「忘れ得ぬ人」の書き出しである。中山晋平、小唄勝太郎、夏川静江、佐々木俊一、宮城道雄、由利あけみ、三浦環、関屋敏子、山田耕作、藤原義江、四家文子、東海林太郎、山本富士子、近衛秀磨、宮城まり子、三浦洗一、曾根史郎、雪村いづみ

等、クラシックから歌謡曲に至るまでの幅広いアーティストとの交流が本書に書き綴られているのである。其の中から、熊さんが大学を卒業してビクターにもぐり込む顛末を、PART 一からリピートしよう。

○私がビクターに入ったのはハーモニカのお陰です

『私が大学を卒業した昭和八年は昭和大不況の真最中。アプトン・シンクレアの本が稲門堂の店頭で幅を利かせる、赤い気分の華やかな時でした。大学は出たけれど、成績も良からう筈もなく、ましてや田舎出のこととして紹介者もなし。となれば誰でも入れる生命保険会社の門を叩くしか道はない。帝国生命で自分と姉夫婦二人を契約したきりで、プラプラしていた所、紹介する人があつて飛び込んだ所が神田淡路町の、阿南正茂ボリドル社長の自宅にあつたレコード店の店番だった。レコード店といっても形だけのものので、お客の姿を見ることは稀である。ところが人間、何が幸するかわからないものです。W大学にハーモニカの好きな人事課長さんがおられました。どこで私の居場所を突き止められたのか、至急な電話がかゝつてきました。』い

ま、ビクターが一人採用するといっている。スグ今川橋のビクターに飛んで行け” というのです。

(1) 米国 RCA キャンデン本社から届いた関屋敏子の紹介英文の和訳。

(2) 国歌「君が代」の移調。

(3) 「安来節」のレードを聞いて其の歌詞と宣伝文の作成。之が私の入社試験の問題でした。(1)はマアママ。(2)はOK。(3)はナカナカの難問。そして最後に岡庄吾さんの面接がよかったのか、”明日から入社せよ”と言われた時は天にも昇る気持ち。ついつい涙が出て、私をビクターに導いてくれたハーモニカに心から感謝したものです』

○犬年に生まれて、犬を家族にして、犬のマークの会社に入社して・・・

犬年に生まれて、犬を家族にして、犬のマークの会社に入社して退職するまで五十年間働き続けて八十六歳になった今日でも、精神の老いを知らない此の老青年は、VICTOR 王国の復活を夢見て、其の情熱を燃やし続けている。「我が家の愛犬第一号はセバードの LUCKY。今の

ジョニーまで、五十六年間に九匹飼いました。LUCKYの次がコロ。その次が二代目 LUCKY。続いてリス。そして ANNA。ついでアッコ。ANNA 二代目。ペンジー。そしてジョニー。犬の種別ではセバード。雑種。雑種。フォックスステリア。みんな素晴らしい私の家族でした。」

○犬と人間は三万年前からの友

『犬は単なる人間のペットだと思っっている人が多いが、冗談じゃない。犬は人間にとって、三万年も前から友です。犬はひたすら人間のために働き、人間と共存して来ました。地球上に共存する動物の右代表が犬なんです。カルタゴの将軍ハンニバルの軍船を追って、アドリア海で息絶えた物語に始まり、英国のエジンバラでは、亡くなった一人暮らしの老人の墓に半年間も座り続けて主人の後を追ったフォックステリア犬の話。アルプス越えの遭難者を何百人も救った老セントバーナード犬。ロッキーマ脈を越え、移住した主人を追ってアメリカ大陸を検断したコリー犬の話が映画化されて大ヒットした「名犬ラッシー」など、外国では数え切れない位、人間と犬の友情物語が綴られています。』

す。どの犬の物語にも思い思いの記念碑や銅像が建てられ、そこが町の観光名所にもなっているんです。日本では「渋谷の忠犬八千公」位しか見当たらないのが残念でなりません……』(PART 1より)

○ビクター交響楽団の設立を夢見て

犬といえば熊さん。ニッパーといえば熊さんを誰しも連想する。必ず「クン」呼ばわりをする百瀬さんから、唯ひとり「サン」呼ばわりされたのが、熊さん其の人だった。

「此の人だけは善人、この人だけは人を騙さない人」だと誰からも愛され続けて来た、熊さんが、今でも胸の中に燃やし続ける夢、それが VICTOR STMPHONY ORCHESTRA である。「文化に貢献、社会に奉仕のモットーに従えば、地方の青少年に、百五十円から二百円の安い料金で良い音楽を聞かせることを考えよう……」こう決心した熊さんが手を組んだ相手が近衛文磨の弟で日本を代表する大指揮者近衛秀磨だった。昭和三十七年のことである。近衛邸は当時赤坂台町にあった。樺太犬が五、六匹いつも寝そべっている長い前庭を通り抜け、熊さんは近衛邸に

二十回近くも通って、其の企画書をまとめあげたのだという。ところが熊さんの期待に反して、会社は此の計画を白紙にもどしてしまったのである。あれ程、努力を重ねてくれた近衛さんに何と言って謝つたらいいのか、熊さんは其の言葉に随分思い悩んだという。

○熊さんは、雄三、登美子、ジョニーの三大家族

熊さんの家は、JR大塚駅からものの一〇分。丸の内線新大塚駅から歩いて五分の高台にある。丹精こめた庭の花々に囲まれて、登美子夫人と愛犬ジョニーの三人(?)暮しである。その昔「ホラ、門の上にビクターのワンチャンがいる……」と、通りがかりの子供達の人気をさらった「門柱にかゝげたニッパー犬」の話は余りにも有名である。「愛社精神に徹したクマさん」だと、業界誌の記事にもなった「門柱のニッパー」は、いま楽器を手にした七匹の犬の像に囲まれて、熊さんの居間の額縁の中に座っている。「ニッパーよ永遠なれ……」毎朝こう祈りながら、此の写真に語りかけるのが熊さんの日課である。

○『ニッパー「犬」とビクターの仲間たち』を発行しよう

『私は「忘れ得ぬ人」という本を制作して五年有余が経過しましたが、創立七十周年が目の前に迫って来ましたが、もう一度、後輩の皆さんへの置土産として本の発行を計画しました。今回の内容は、とても大掛かりなので、とても私には作れません。私の役割は計画をたてるだけです。少ない乍らも、制作資金は私が出します。しかし此の本を作るのは、ビクター広しといえども貴方だけです。此の本は必ず、いつの日か後輩の皆さんに喜ばれれるもの確信します……。平成七年秋、熱海の伊豆山荘で熊さんは、私にこう告げて本の制作を私に指示したのである。熊さんの意気を感じた私は、其の場で此の大役を、一切の経費自分持ちで引き受けることにした。熊さんのツルの一声、犬の一声なかりせば、此の本の誕生はなかったであろう。

(熊倉雄三) 私の発案多数の現役並びにOBの皆様のご賛同を頂き、茲に『ニッパー「犬」とビクターの仲間たち』PARTー1、PARTー2の完成をみました。こんなうれしいことはありません。とりわけ、此の本の作成に当り、企画取材、執筆、校正、及び発行の事務作業に至るまで、たっ

た一人でやってくれた小藤武門君に、心から感謝申し上げます。ご承知の通り氏はビクターのレコード部門を底辺から支えた男で、戦後のレコード界に君臨した彼こそビクターを代表する名物男の一人ではないでしょうか。また皆様は、此の本をご覧になって、其の出来栄に感心されたに違いありません。それも其の筈です。彼は「S盤アワー／あゝわが青春のポップス」、「あゝわが青春の応援歌」、「若き血に燃ゆる者／あゝわが青春の慶応」、「レコードの昭和史」、「鈴懸の径／あゝわが青春の立教」など、青春シリーズの執筆者として知られ、また数々の有名タレントのゴースト・ライターとしても活躍する此の業界のプロ中のプロなのです。また映画と放送界にも大きな影響力を持ち、「なかはら ひろと」のペンネームで「ユア・ヒット・パレード」、「午後四時の音楽」、「S盤アワー」、「ハーバーライト」など多数の人気番組の制作に当り、「死ぬほど愛して」、「はるかなる山の呼び声」、「太陽はひとりぼっち」、「太陽の彼方こ」など、数多くの映画と歌の題名の作者としても知られる小藤君は、ウォルト・ディズニーを始め、数多くの外国映画の歌の邦訳を担当したゴースト・ラ

イターでもあったことを知っている人はいないでしょう。また此の本が発行出来たもう一つの理由は、ビクター興産の大曾根収社長の「大英断」で、本書の発行を特別に引き受けて下さったこととあります。大曾根社長と小藤君の、いづれを欠いても、本書が陽の目を見ることはなかったのです。改めて両氏に、心から感謝を申し上げたいと思います。

○ニッパ―よ永遠なれ―文化に貢献、社会に奉仕、地球に奉仕

ニッパ―は英国生まれの米国育ち。そして今や日本ビクターの商標として、私達の上に、燦然と輝やいている。

「文化に貢献、社会に奉仕」の社是にもう一つ「地球に奉仕」を書き加えて、私達は二十一世紀に向けて邁進しようではありませんか。

篠崎正先輩が、私達後輩に書き残した「ビクター行進曲」を高らかに歌いながら……

歓びあふれ 歌声ひびき

希望明るく湧くあした

愛と誠の旗じるし

世界のマークかざしつつ

進めよビクター限りなく

たゝえよVICTOR 高らかに

VICTOR VICTOR

われらのビクター

【私はニッパ―？ 犬年生まれの犬年入社】

私は昭和九年生まれ。ビクターに入社したのも何故か犬年。そんなせいかニッパ―が聞き耳をたてている蓄音器のことが気にかかり、蓄音器を探して世界中を走り回りました。ただ今の数は約百数十台。いつの間にか、有名なコレクターの一人にされてしまいました。くわしい御話は、次号にさせて頂きます。ビクター・マンならずとも、みなさん、私の犬を、私のニッパ―を、ビクター共々可愛がって下さい。(本田悦久)